

荘司 一步

1. 事業実施の目的

クルス・ベルデ遺跡における発掘調査の実施と考古学的な基礎資料の獲得

2. 実施場所

ペルー共和国、ラ・リベルタ州、マグダレーナ・デ・カオ、リマ州、リマ

3. 実施期日

平成 28 年 8 月 9 日（火）から 11 月 4 日（金）

4. 成果報告

●事業の概要

【調査活動の目的と調査対象】

本調査の目的は、ペルー共和国、ラ・リベルタ州沿岸部に位置する、クルス・ベルデ遺跡の発掘調査と遺物の整理・分析を通じて、以下の 3 点を達成することである。

- ① 発掘調査を通じて、基礎的な資料を蓄積させること。
- ② 層位的な考古学データの収集によって、遺跡形成の時間的な位置づけを明らかにすること。
- ③ 遺構と遺物の層位的・空間的な分布状況や、公共建造物の有無などから、集落構造と範囲の通時的な変遷を明らかにすること。

また、9 月 12 日～16 日に参加するペルー考古学会議において、調査対象遺跡に関わる最新の研究状況を把握し、発掘調査に役立てる。

クルス・ベルデ遺跡は、海岸線から 200m ほどの距離に位置しており、アンデス文明形成期前期～中期（紀元前 1800 年～800 年頃）にあたる漁撈集落であったと考えられている。2 つのマウンド群とそれに挟まれた平坦面に遺跡が分布しており、そのうちで今回の調査対象となるのは海側（南西）の A-2 地区（マウンド）と平坦面を指す A-1 地区である。発掘調査は 3 週間実施され、遺跡近郊のマグダレーナ・デ・カオ村に滞在しながら、車で 10 分かけて遺跡に通った。

【実施内容】

発掘調査の実施内容と結果について、A-1 地区と A-2 地区に分けて記述する。（地区の呼称は図 2 を参照）

■A-1 地区

2m×2m の試掘坑を 5 つ設定し、地山層（自然堆積による無遺物層）にいたるまで発掘調査を行った。3 つの試掘坑(O1N20, O1N42, O1N64)は、後述するトレンチと軸を揃え、マウンド頂上にある基準点から、ほぼ北東方向へ 40m おきに設定され、残り 2 つ試掘坑(O12N9, E11N9)は、この軸と直交するようにして北西方向と南西方向へ中心軸からそれぞれ 22m の位置に設定された（図 2 を参照）。

前者の 3 つの試掘坑からはそれぞれ 2 枚の床面が検出され、当時の生活面がおおよそ 2 時期に分かれて存在していたことがわかった。2 つの床面を覆う包含層からは、形成期中期（紀元前 1200～800 年頃）に特徴的な土器破片が出土していることから、この時期に対応する生活面であるといえる。ほとんどの土器の器種は無頸壺という実用的な煮炊きの道具であり、火を受けたものも多いことから、日常的な調理などの活動が行われていたと推測できる。また、床面から貝や魚などの動物遺存体や炭化した有機物が多く出土しているほか、焼土や

焼石なども見られた。さらに、O1N64からは、炭やよく焼けた石が詰まった20 cm大の土坑が検出されており、炉の一部と想定できる。加えて、O1N20から15mほど離れた地点からは、別の考古学者が過去に調査した結果、簡素な両面壁からなる歪みを持った小さな部屋状構造物が一部検出されている。これらのことから、A-1地区では、形成期中期に火の使用を伴う居住活動や廃棄活動が繰り返されたことがわかる。

一方で、後者の2つの試掘坑(O12N9, E11N9)からは、人間活動の痕跡がほとんど認められなかった。この試掘坑はそれぞれ、砂を含む50 cmほどの堆積層に地山が覆われているだけであり、形成期の人間活動を示す土器や自然遺物、炭化物は検出されていない。このことから、前述の3つの試掘坑で確認された生活面はこの2つの試掘坑までは広がっておらず、A-1地区における形成期の生活空間は標高9m以上の範囲の島状地形に限られていたことが明らかになった。

なお、これらの5つの試掘坑の表層からは、地方王国期（紀元後900～1500年頃）の遺物が出土しているが、床面を形成するような具体的な活動は認められていない。

■A-2地区（マウンド）

2m×18mのトレンチ(試掘坑 O1S3～N6)を設定し、一部地山層にいたるまで自然層位での発掘を行った。トレンチは基準点を通る中心軸に沿って北西方向に伸び、マウンドの頂上から北西側の裾野にかけて設定された。さらに、このトレンチから3mほど離れたところにある別の考古学者による過去の発掘坑を清掃し、改めて一部地山層まで掘り下げた。

このトレンチからは石とアドベ（日干しレンガ）を建築材として部屋状の構造物を形成していたとみられる両面壁や、粘土で作られた床、人為的に盛られた基壇の埋め土、埋葬などが検出された。地表からおよそ40 cmの上層と40 cm～70 cmほどの中層、70 cm～2m20 cmの下層に分けて以下に記述する。なお、発掘は自然層位に基づいて行われ、前述の上層、中層、下層という区分に対応した堆積の深さは、マウンド頂上部（O1S1グリッド）を基準にしたおおよその値である。

a) 上層

上層は、地方王国期（A.D.900～1500年頃）の土器を含んでおり、この時期の活動によって形成された。表層のすぐ下からは2m四方ほどの簡素な部屋状構造物が検出され、小規模な建築活動が行われたことがわかる。特筆すべきはその建材であり、全て珊瑚石で構成されている。しかし、これに伴う床面や遺物の平面的な広がり是不明瞭である。また、この部屋状構造物より20 cmほど深い3b層の上面からは、地方王国期に属するとみられる半完形の土器が出土した。このマウンド上の遺構と関連した奉納活動と想定されるが、内容物などは析出されていない。また、土器が設置されていた3b層の上面に何らかの活動面があったと思われるが、床面を形成するほどの活動ではなかったようである。地方王国期の活動が行われた他の遺跡と比べても、土器とその他の遺物の出土量はきわめて少ない。

b) 中層

中層は、土器を全く含まない層であり、先土器時代（～B.C.1500年）と想定される。現在準備を進めている放射性炭素年代測定法による炭化物の分析によって、より年代が絞られることが期待される。この層には床面と建築が対応した3つの建築時期を想定できる。最下層の1時期目の床は、床下に埋め土を30 cmほど積み上げ、その上面に炭化物層を作り、粘土質の床を敷く。こうした床下の建築手法は、後に述べる下層に至るまで、A-2マウンドで確認された全ての床面に共通している。この1時期目の床面に対応する建築は、80 cm近い厚さを持つ直線的な両面壁であり、20 cm大の丸石を積み上げて精巧に作られている。こ

の壁は、西側に入口を持つことから、分厚い壁で囲われた空間がマウンド上に存在していたことがうかがえる。

2 時期目と 3 時期目の床は、ともに埋め土が 10 cm ほどと薄いのが、明瞭に床が作り替えられていることが確認できた。それぞれの床面に対応するアドベの両面壁が検出されている一方、1 時期目の床面に対応していた石製の厚い両面壁も埋められることなく同時に機能していることから、アドベの壁は石製の両面壁によって囲まれた空間を区画・分割していたと思われる。2 時期目の床面に対応するアドベの壁は 3 時期目の床面によって覆われていた。

これら 3 時期に分かれる床面と壁の建築活動は、マウンドの頂上部のみに限られている。先述のように土器は共伴していないが、埋め土からは石器や自然遺物が多く出土している。床面と埋め土の間に形成された炭化物層は、埋め土上面に含まれる貝類や土が焼けていることから、埋め土の上で火を焚くことによって形成された層であることがわかる。なおこれらの床と埋め土は、おそらく基壇上に築かれたと考えられるが、基壇の土留め壁は今回の発掘区では検出されていない。

c) 下層

下層は、中層と同様に土器をまったく含まない層であり、先土器時代（～紀元前 1500 年）と想定される。今後の年代測定によって時期が絞られると期待できる。この層には、およそ 3 時期に分かれる床面が検出されており、建築の改変が繰り返されていたことがわかる。最下層にあたる 1 時期目の床面は、地山層の直上に作られており、O1S1、O1N6、過去の発掘坑（S.V.1）の三か所で同様の床面の存在が確認されていることから、マウンド全体に広がる広い空間が存在していたことがわかる。この床面に対応するその他の建築は確認されていない。

2 時期目になると、1 時期目の床面は大量の埋め土（動植物遺存体、丸石、土を含む）と中層と同様に炭化物層で覆われ、その上に新たな床面が敷かれた。埋め土の厚さは 120 cm にもおよぶ。1 時期目と同様に、開放的な空間が広がっていた可能性が高い。この 2 時期目では、非常に薄い床の張り替えが複数回行われており、小規模の建築活動が定期的に繰り返されていたようである。このような建築活動には、複数の埋葬が共伴していたことが確認されている。O1N5 および N6 では 5 つの埋葬が、過去の発掘坑（S.V.1）では 2 つの埋葬がこの時期に相当する層位から検出されている。これらの埋葬方法は多様であり、土坑に遺体を埋めるものや、床面に被葬者を安置し、土をかぶせるもの、改築の過程で埋め土の中に埋葬するものなどが認められた。また、埋葬姿勢や頭位などにも規則性がない。これら埋葬の一つである「TM7」は、全ての部位の人骨が良好な状態で出土し、植物繊維で編まれたマットでくるまれていた。被葬者の足元には、座った人間の姿が表現された珊瑚石製の人形が副葬されていた。その他、2 つの埋葬でも植物性繊維でできたマットが出土している。

3 時期目も同様に 80 cm 近い埋め土と炭化物層の上に床が敷かれた。マウンド上で広く確認されており、開放的な空間が広がっていたことが想定される。また、2 時期目と同じく複数回を数える床の張り替えが行われていた。この時期にも埋葬が 1 体確認されており、2 時期目と同様に建築活動に埋葬が組み込まれていたことがわかる。しかし、床面に対応する壁の存在は確認されておらず、埋め土を支える基壇の土留め壁も今回の発掘区からは確認されていない。

下層からは、石器や骨角器が多く土器は出土しない。また自然遺物が埋め土から大量に出土しているほか、過去の発掘坑を掘り下げた S.V.1 において床面に付随して骨角器と植物遺存体出土するなどなんらかの活動が行われていたことも想定できる。

【ペルー考古学会議への参加】

9月12日～16日にリマで行われたペルー考古学会議に参加した。この会議は、前年度に国内で行われた全ての調査の成果を公開するものであり、国内外から多くの考古学者が毎年集まる。報告者が調査する北海岸の沿岸部は、近年、発掘調査の進展が大きく、クルス・ベルデ遺跡と同時代の遺跡も多く調査されている。これらの調査成果を聞くことは、クルス・ベルデ遺跡の調査を遂行し、データを収集するうえでも、データの解釈を行ううえでも欠かせない。

今回の会議では、とくに2つの遺跡について有益な情報を得るに至った。一つは、ビルー谷のワカ・ネグラ・デ・グアニャベ遺跡であり（図1を参照）、クルス・ベルデ遺跡とほぼ同時期の形成期中期の基壇状建造物の近くに、厚い先土器時代の居住址と埋葬が存在していたことが報告された。クルス・ベルデ遺跡をめぐる先土器時代と形成期中期の状況とは遺跡の性格に異なる点が多いが、同時代における北海岸の文化的変遷を考えるうえで重要である。

もう一方は、チャオ谷のロス・モルテロス遺跡である（図1を参照）。この遺跡の発掘調査によって、ペルー北海岸最古となる先土器時代のアドベ（日干しレンガ）の存在が報告された。このことは、クルス・ベルデ遺跡において、土器を含まない層位からアドベの両面壁が検出された際、建築活動と編年を解釈するうえで非常に役立った。このように、ペルー考古学会議に参加したことによって、発掘調査を実施するうえで有益な情報を収集することができた。

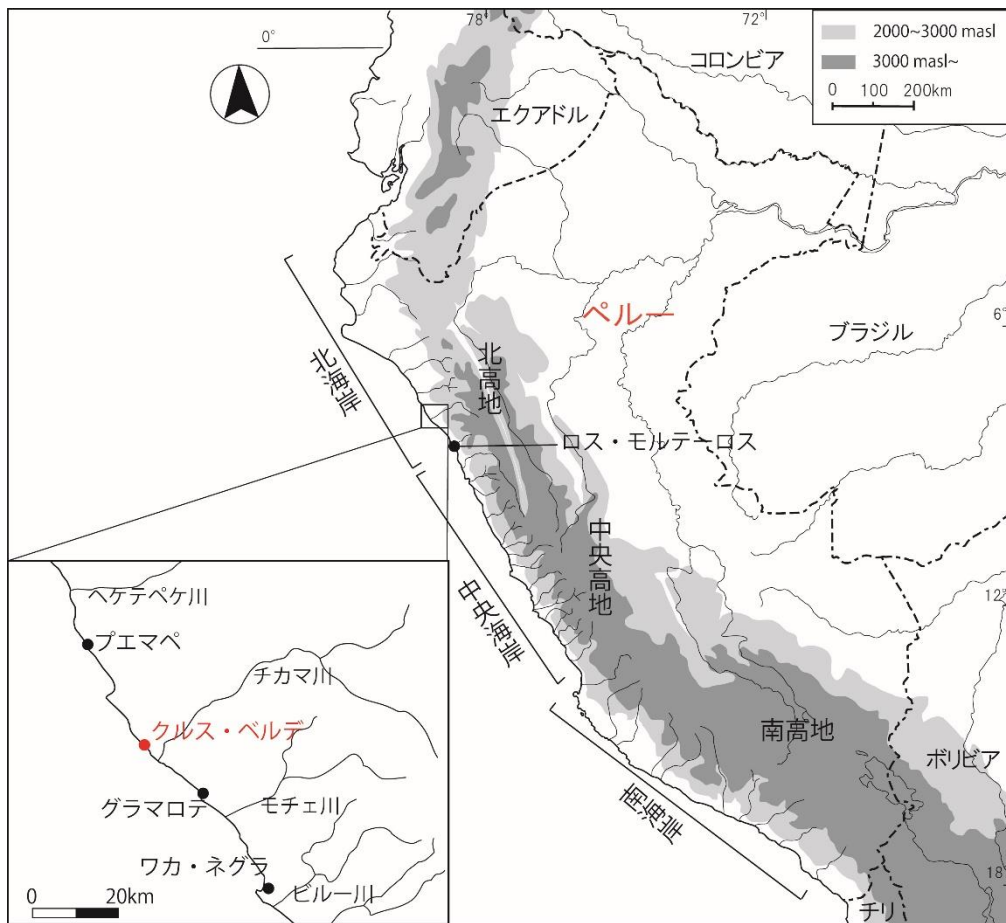


図1 クルス・ベルデ遺跡の位置と周辺遺跡

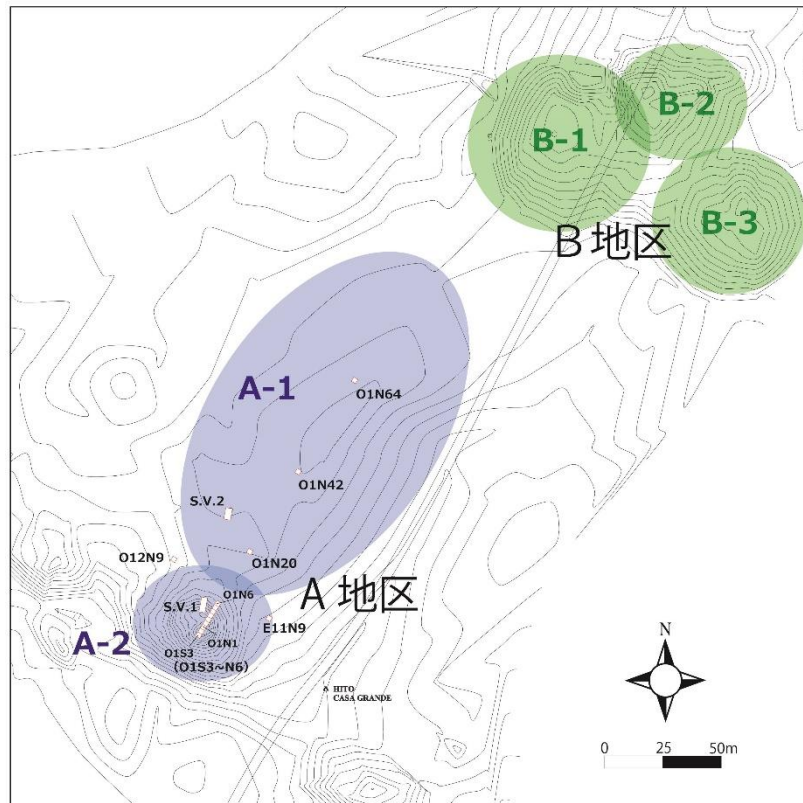


図2 クルス・ベルデ遺跡における発掘坑の位置と地区の呼称(S.V.1 および 2 は別の調査者による過去の発掘坑)

●本事業の実施によって得られた成果

【調査成果まとめ】

今回の発掘調査によって、遺跡を形成するに至った建築活動や廃棄、埋納、埋葬されて残された考古資料の層位的な収集によって、博士論文の作成に向けた基礎的なデータと資料を獲得することができた。出土した考古遺物は、段ボール箱で14箱にのぼる。

発掘調査を通じた遺物の出土状況と繰り返される建築活動の変化から、遺跡の形成過程について4つのPhaseを設定できることが明らかになった。

-Phase 1 (先土器時代)：粘土質の床と厚い埋め土を用いた建築活動、埋葬行為によって開放的な空間が築かれた時期である。埋め土の規模や慣習的に定められた床面の建築過程、あらかじめ用意された粘土で作られた床などの存在から、公共的な活動によって建設、利用された建造物である可能性が高い。しかし、壁などの建築が不明瞭であることと、比較すべき同時代の居住址が検出されていないことから断定はできない。活動はA-2地区に限られている。

-Phase 2 (先土器時代)：粘土質の床と埋め土、両面壁を用いた建築活動によって、マウンドの頂上部に閉鎖的な空間が築かれた時期である。慣習的に定められた床面の建築過程が繰り返される。Phase 2の中の1時期目に建設された分厚い石製の両面壁は丁寧に石を積み上げて直線的に作られており、一般的に報告されている住居址などと建築手法の点で異なることから、公共的な活動によって建設、利用された建造物であると想定できる。活動は

A-2 地区に限られている。

-Phase 3 (形成期中期) : A-2 マウンドの北東側にある平坦な地形上で居住活動が行われた時期である。それぞれの発掘坑から2つの床面が検出されていることから、2 時期に細分される。また、炭化物や焼石、焼土、土器の出土状況から、火を用いた煮炊きなどの活動が行われていた可能性が高い。石製の両面壁が検出されているが、簡素な作りであり、壁も薄い。

-Phase 4 (地方王国期) : チムー文化、ランバイエケ文化と呼ばれる文化的特徴を持つ土器が出土している。マウンドの頂上部に土器やウミギクガイ、銅製品の奉納が行われたほか、珊瑚石で作った部屋状構造物が築かれた。また、A-1 地区でも少量の遺物が出土していることから、クルス・ベルデ遺跡全体にその活動範囲が及んでいたことがわかる。

クルス・ベルデ遺跡は、地表面の観察と小規模な発掘調査によって形成期中期に属する遺跡と単純に考えられてきた。しかし、今回の発掘調査によって、その形成過程は複雑であり多様な時期にわたっていたことが明らかになった。このことは、今後発掘調査を継続していくうえでは欠かせない情報であり、博士論文のための研究計画や研究手法を修正するうえで重要な成果となった。また、クルス・ベルデ遺跡の形成過程を明らかにしたことは、チカマ川下流域における先土器時代および形成期の状況や歴史の変遷を明らかにし、同河谷内の遺跡間関係やセトルメントパターンを理解するうえでも重要な知見をもたらすものである。

また発掘調査から A-1 地区において居住活動が行われていたことがほぼ確実となったが、その範囲は標高 9m 以上の細長い島状の地形に限られているようである。今後はこの範囲内においてどのように住居遺構が分布し、どのような集落構造が存在したのか明らかにしていく必要がある。また、A-2 地区からは公共建造物と想定できる基壇状の建造物が改築を繰り返しながら存在していたことが明らかになった。しかし、A-1 地区でみられた居住域とは、時代を異にする可能性が高く、両者の関係はいまだ不明瞭なままである。放射性炭素年代測定法による分析や、両地区の中間地点の発掘調査によって検討を進める必要がある。

本調査の成果は、年代測定の結果を待って、国内査読誌およびペルー国内誌に論文として投稿する予定である。

●本事業について

博士論文の研究に向けて基礎的な資料とデータを収集した本事業は、計画の修正を図りながら研究を建設的に進めていくうえで非常に重要な作業であった。しかし、他国での発掘調査を伴う考古学研究は、多くの調査資金が必要であり、容易に行うことはできない。このような現状において、学生への旅費支援体制としての学生派遣事業は本学の大きな魅力の一つである。このようなことから、今後もこのような事業が継続されることを希望している。